

## 令和元年版国土交通白書 インタビュー（UR都市機構）

「MUJI×UR団地リノベーションプロジェクト」（白書第1部第3章掲載）について、UR都市機構住宅経営部の坂下主幹、小原氏、広報室の橋主幹にお話を伺った。

まずは、令和元年版国土交通白書に対する率直なご感想をお聞かせください。

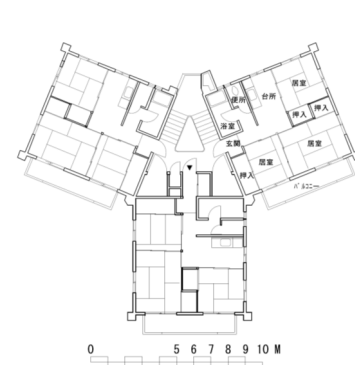
橋氏 : 白書は幅広く色々な話題が取り扱われていますが、私は、今後の住空間に対する国民意識調査の結果が印象的でした。URでは先日、2030年の住まい方をイメージしたモデル住戸を、東京・赤羽台団地の「スターハウス」にオープンしました。そこでは、建設当初の再現モデル住戸とともに、AI、IoTなどの新技術を活用した魅力的な生活環境を提案していますが、国民意識調査ではAI、IoTを活用した住宅へのニーズが特に20~30代において高くなっており、参考になります。

スターハウスの外観



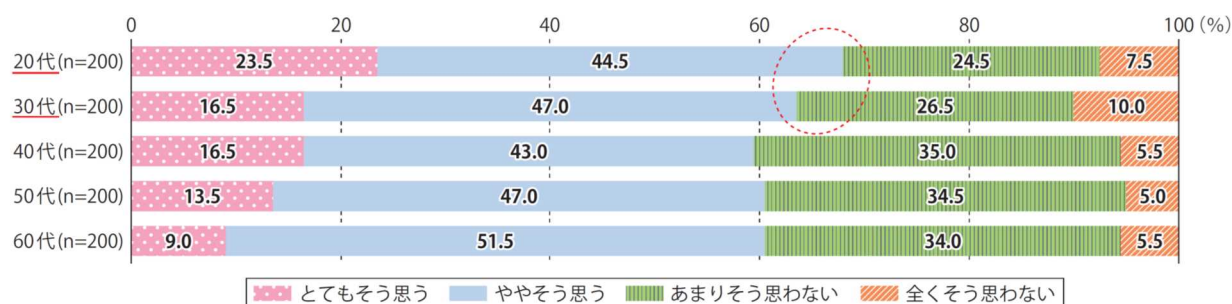
資料) UR都市機構

スターハウスの間取り



資料) UR都市機構

住んでみたい未来の住宅として、「AI/IoTで快適な住宅」へのニーズ



資料) 国土交通省「国民意識調査」

坂下氏 : 「日本人の感性」について言及しているところなど、これまでの国土交通白書には見られないような内容であり、面白いなと思いました。

小原氏 : 白書で取り上げられた「MUJI×UR」プロジェクトでは、MUJI会員の方々へのアンケートを通じて住まいに関するニーズを把握し、それらに対応した部屋を提

供してきました。白書でも未来の住まいを展望するにあたりアンケートが行われており、使う人達の意識に合わせた住空間を作るのが重要だと改めて考えさせられました。

**それでは、「MUJI×UR」プロジェクトについてお伺いします。まずは、このプロジェクトが始まったきっかけはどのようなものだったのですか。**

小原氏 : これは2012年に大阪ではじまったプロジェクトです。当時、若い人にも住んでもらいたいと考えていた大阪のある団地のUR担当者が、MUJIブランドを展開する良品計画さんから提案を受けたのがきっかけです。先ほど述べたMUJI会員へのアンケートにより「間取りを自由にできるとよい」などのニーズを把握していましたので、コンセプトとして“生かす、変える、自由にできる”を打ち出し、それを実現する取組みを具体的に進めていきました。白書に掲載された、昔ながらの柱や鴨居を残しておく部屋の他には、例えば、少しでも広々と暮らせるよう、押入の壁を取り払い、ベッドにアレンジするという、さながらドラえもんのお部屋のような、チャレンジングな取組みも行っています。

押入をベッドにアレンジした「MUJI×UR」の部屋



資料) UR 都市機構

**実際に、「MUJI×UR」に住まれている方の声はいかがですか。**

小原氏 : 「MUJI×UR」の部屋は、そもそも万人受けするようなコンセプトではなく、部屋に対するこだわりをお持ちの方など、コアな方を対象としています。そういった皆さんに大変綺麗に使用して頂いており、非常に好評です。年齢層としては、20~30代の方々の契約が全体の6割近くを占めていますが、最近は、割と年配の方がお子様連れで見学に来られたりもしています。

**白書のテーマでもある、住む人の感性(美意識)を反映した住宅という意味で、DIYが可能なお部屋が最近増えているように思いますが、URではいかがですか。**

小原氏 : URで展開しているDIY可能な部屋には2種類あって、一つは表層部分のDIYを楽しめるPetit DIY住宅、もう一つは大規模なDIYができるDIY住宅です。決められた範囲内であれば退去時の現状復旧義務もなく、自由に部屋をアレンジ可能です。

坂下氏 : 中には団地丸ごとOKというところもあって、大阪の千島団地ではどの部屋でもDIY可能となっています。また、団地内にDIYの工房も常設されていま

す。

小原氏 : なぜかはわかりませんが、関西方面でDIYが活発だという傾向がありますね。「MUJI×UR」も関西発です。関西人の気質としてこういった新しいものが好きという傾向が他の地域に比べて高いのでしょうか。白書でこうしたこともわかると面白いですね。

**「MUJI×UR」の他にも、進めているプロジェクトはありますか。**

小原氏 : 無印良品さんの他にはイケアさんとも同様のプロジェクトを2013年から始めています。URには全部で72万戸の住宅がありますが、そのうちこれら2つのプロジェクトの住宅は1,000戸くらいになります。これらのプロジェクト住宅も少しずつ増やしていきませんが、現在は、その他大多数の通常の部屋について、内装を現代に合わせて整備するなど、設備更新に注力しているところです。

また、こうしたハード整備と合わせて、ソフト的な取組みとして、団地におけるコミュニティ環境の整備も進めていきたいと考えています。その一環として、東京都八王子市のベルコリーヌ南大沢では、無印良品の家HPで掲載されて反響の高かった「もしも団地内にキッチンスタジオがあったなら」の意見に基づき整備し、近隣の大学と共にコミュニティ活動を行いました。

住民で賑わうベルコリーヌ南大沢の集会所



資料) UR 都市機構

**本日は、色々とお話をお聞かせ頂きましてありがとうございました。最後に、今後の国土交通行政に期待することなどありましたら、お聞かせください。**

小原氏 : 期待することというより一国民としての思いですが、「こういうことをやってみたい!」と思った時にそれがすぐに実現できるような、そんな社会になってほしいなと思っています。国交省関係に限らず、社会に必要なルールが色々ある中、少しでも自由に色々なことができるようになればいいなと思っています。

坂下氏 : 国土交通行政は分野が非常に多岐に渡り大変だとは思いますが、白書でも示されていたような国民の声を、できるだけ政策に反映してもらえるといいなと思います。これは、私自身も、業務上日々感じていることです。

橘氏 : 私自身の職務柄、考えていることですが、「官」が扱う公的な情報について、市民の方々にもっと関心を持ってもらい、理解してもらうにはどういう意思疎通のあり方があるのかなと思っています。防災関係など、有事と平時での関心の

違いはあるとは思いますが、平時においても関心を持ってもらえるようにすることが、事業を円滑に進める上で重要なことだと思っています。

「令和元年版国土交通白書」

<http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h30/index.html>

インタビューにご協力頂きまして、ありがとうございました！

(独)都市再生機構 (UR 都市機構)

住宅経営部営業推進課 主幹 坂下 真 氏 (写真左)

住宅経営部ストック活用計画課 小原 裕 氏 (写真右)

広報室広報課 主幹 橘 亜希 氏

